一　朝鮮半島から見た鞠智城

西谷　正

ただ今御紹介いただきました西谷でございます。どうぞよろしくお願いいたします。鞠智城に関しては、もう皆さんのお手元に非常に素晴らしいテキスト（『鞠智城東京シンポジウム　古代山城鞠智城を考えるⅡ　東アジアの中の古代鞠智城　鞠智城の調査成果』）を用意していただいていますけれども、これにこれまでの研究の歴史が記されておりまして、江戸時代から学者の関心の的となり、今日に至っているわけでございます。特に昭和四二年から始まった熊本県教育委員会による本格的な発掘調査、その成果には計り知れないものがございます。ただ今矢野さんからお話しがあったとおりでございます。私はまあ、専門の朝鮮半島の考古学の立場から少し考えてみたいと思っております。

一　鞠智城の築城とその背景

まず最初に、鞠智城の築造年代の問題です。これは今までも触れてこられましたように、だいたい七世紀の中頃から後半ということです。その切っ掛けが白村江の戦い、その敗戦にあるというこ

写真 14　西谷　正氏

とは、明白だと思っております。この点に関しましては、大野・基肄城の築造から三〇数年経った時代、つまり文武天皇二年（西暦六九八）に大野・基肄と鞠智城の三つの城を修復したという記事があるわけです。それから考えますと、それに遡って、『日本書紀』に書いてある六六三年の敗戦の後、大野城、基肄城とともに、鞠智城が同時に造られたと考えるのが自然であろうと思います。

これは、今もお話しがございましたけれども、鞠智城から発掘される遺物ですね、土器とか瓦とか、からみても七世紀中頃から後半の築造ということは明らかだと思っております。しかも、大野城や基肄城という大宰府に直結する山城と併せて、鞠智城を築いたとなると、これはいったい両者にどういう関係があるのかということですね。この点につきましては、ただ今御紹介しましたお手元に用意していただいている、このテキスト（『鞠智城の調査成果』）のですね、二二ページをちょっとお開きいただきたいと思うのです。

これを御覧いただきますと、今から七三年前の昭和一二年のことですが、熊本県の先学である坂本経堯という先生が、この鞠智城の役割について三つの性格を考えておられますね。二二ページの中ほ

ど、ちょっといったところに、まず一つは有明海からの進入を想定しての築城、二番目が大宰府の兵站基地のような性格、そして三番目が九州南部に対する備えという、三つの考え方をすでに出しておられるわけです。それが現在も継承されているというところです。

最初の有明海を重視したという御意見は笹山先生のお話しにもございました。そして、先ほど五百旗頭先生は、むしろ大宰府が陥落した時の備えの城というお話しでした。私は、笹山先生と同じ有明海を重視した、そういう山城ではなかったかと考えております。つまり、地図で御覧いただいてもお分かりのように、大陸、朝鮮半島からみますと、対馬・壱岐を経て、北九州の福岡に至るわけです。このルートはそれこそ縄文時代、何千年前からの交流のあったところでございまして、その上に稲作文化が入ってきたりと、長年にわたる日本列島と朝鮮半島の交流のルートですね。したがって、それに備えるべく、対馬の金田城なんかと一緒に、大野城・基肄城が築かれるのは当然でございます。

もう一つは、有明海の問題ですね。これは、先ほど笹山先生のお話しにございましたけれども、菊池川の中流域、江田船山古墳の出土品を見ると、百済との関係が深い遺物が出土しております。そして、その菊池川の下流域から南に五〇～六〇キロメートル行ったところでしょうか、現在の八代の辺りに肥の葦北国造がいて、その一族の日羅が百済の政府に仕えて、そこにおいて高官になっているということがございます。そういうことで有明海に注ぐ、菊池川の下流域沿岸部というのは古くから朝鮮半島との関係の深いところでございます。そういう意味で、私は、現在の福岡平野から壱岐・対馬を経て、朝鮮半島に至る、これがメインのルートで、言ってみれば国家的な交流の舞台、ルートであったと思うのです。

それに対して、地域間交流と申しましょうか、出雲は出雲、吉備は吉備というようなかたちで各地域の豪族が朝鮮半島と独自の交流を持っていた、ということは明らかなのです。そういう意味では、菊池川流域の豪族が有明海を通じて朝鮮半島と独自の交流を持っていたという歴史があったからこそ、北の大野城・基肄城に対して、南の鞠智城というかたちですね、そういう対等の関係で、もちろん規模も違うし、重点の置き方も違うでしょうが、北の護りの大野城・基肄城と、南の有明海に面する鞠智城という形で築城されたのではないかと、そのように考えるところでございます。

二　日本古代山城の中の鞠智城

それでもう一つは、大野城・基肄城と鞠智城との違いなのですけれども、大野城・基肄城の場合は、文字通り山城でございます。大野城の場合は、その南の麓に都府楼の俗称で知られる大宰府の政庁があった中枢部が置かれていました。そのすぐ背後の山に山城を築いたのです。そういう意味では、南の山麓の平地城と、その背後の山城というのは、セットの関係にあるわけですね。

それに対して、鞠智城の場合は、標高が一〇〇メートル前後というところで、山城としては、非常に低いところです。また、なだらかというか穏やかな山ですから、平坦地も多いのです。そこに三時期がございますけれども、七二棟という、ずいぶんとたくさんの建物が建っているのです。そういう意味では、鞠智城の場合は、ただの山城ではなくて、山城と平地城を兼ね備えた、そういう二面性のある山城ではないかと考えるわけです。

このように大野城、基肄城そして鞠智城が大宰府を護る周辺の山城として築かれました。これは後で鈴木先生が触れられるかもしれませんが、最近、明日香において中枢部の護りの施設がその周囲にあるということが指摘されています。大宰府も後に「遠の朝廷」と呼ばれるようになりますが、そういう都になぞらえて、都に準ずる「遠の朝廷」の周辺に山城を配置したと、そういう性格のものではなかったかと思っております。

三　朝鮮半島の古代山城

そのように王都周辺の、ある

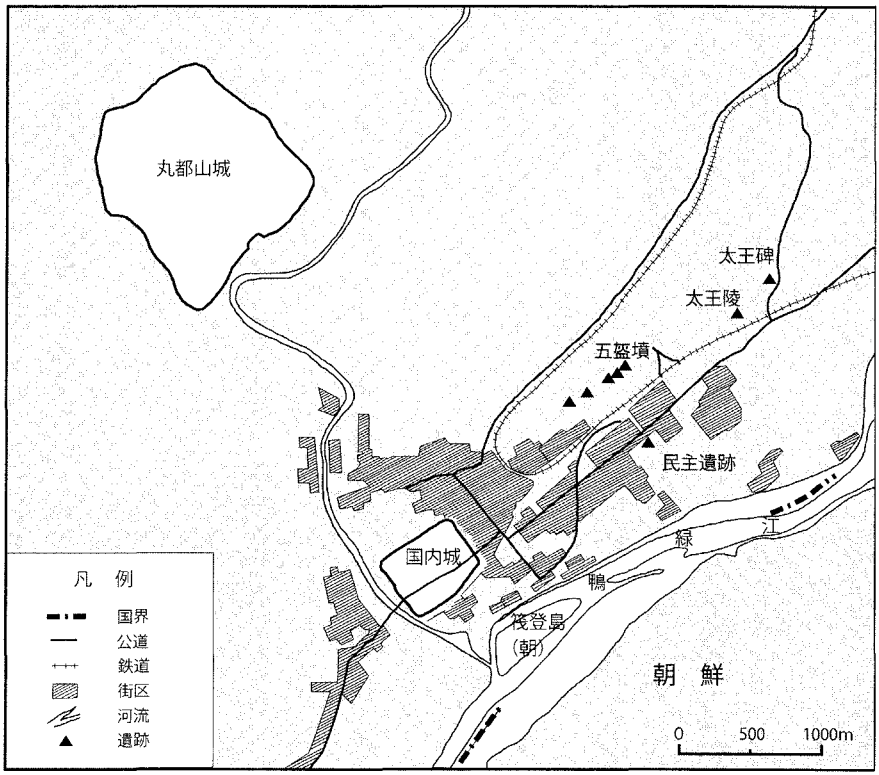

図８　国内城と丸都山城

（吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004 所収挿図を再トレース）

いは王都に準ずる拠点の周辺の山城という意味では、朝鮮半島にしばしば見られるところでございます。朝鮮半島といえば、北に高句麗、南の西側に百済、東側に新羅という三つの国と加耶が分裂して、お互いに覇権を競っていた時代ですね。

① 高句麗

まず、北の高句麗の場合を見てみますと、お手元の発表要旨集（『鞠智城東京シンポジウム　古代山城鞠智城を考えるⅡ　東アジアの中の古代鞠智城』）の二一ページになります。その上段に国内城と丸都山城（図八）というのがございます。その右下の隅の方が朝鮮です。鴨緑江を挟んで左上の方、つまり西北の方が中国ですね。その鴨緑江の河岸のところに小さく出ていますが、国内城がございます。これが平地城なんです。一辺七〇〇メートルぐらいの規模です。そこから北西に約二・五キロメートル行ったところに、丸都山城が位置しています。こういう平地城の国内城と、山城の丸都山城がセットの関係にあることが基本ということなんです。

高句麗は、後に現在の北朝鮮の平壌に都を移しますけれども、その時も同様でございまして、山の麓に安鶴宮という宮殿を設け、後の山に大城山城という山城を築きました。そういうセット関係が一般的に各国の王都に見られる城郭の姿ですね。そういう意味では、今の丸都山城と国内城の関係は、後の山の大野城と下の平地の大宰府政庁という、セット関係と共通しているのではないかと思うのです。

九州というと、装飾古墳のメッカでもあるわけですが、六世紀後半の装飾古墳が、一番多いのは

熊本県でございます。その装飾古墳の中に明らかに高句麗の壁画の題材が見られるということは御承知だと思います。そういうことで、高句麗との関係は早くからございます。後でこの点についても鈴木先生のお話しに出てくるかもしれませんが、聖徳太子の仏教の師が高句麗僧の慧慈であったりとか、がございます。そのころ新羅がどんどん勢力を伸ばしてくると、百済と倭の密接な関係に加えて新たにですね、新羅を牽制するために高句麗と倭との関係、交流ができるわけです。そういう中で、ひょっとしたら大宰府における平地城と山城というセット関係は、高句麗のアイデアを導入している可能性はないだろうかと思うんです。

② 百済

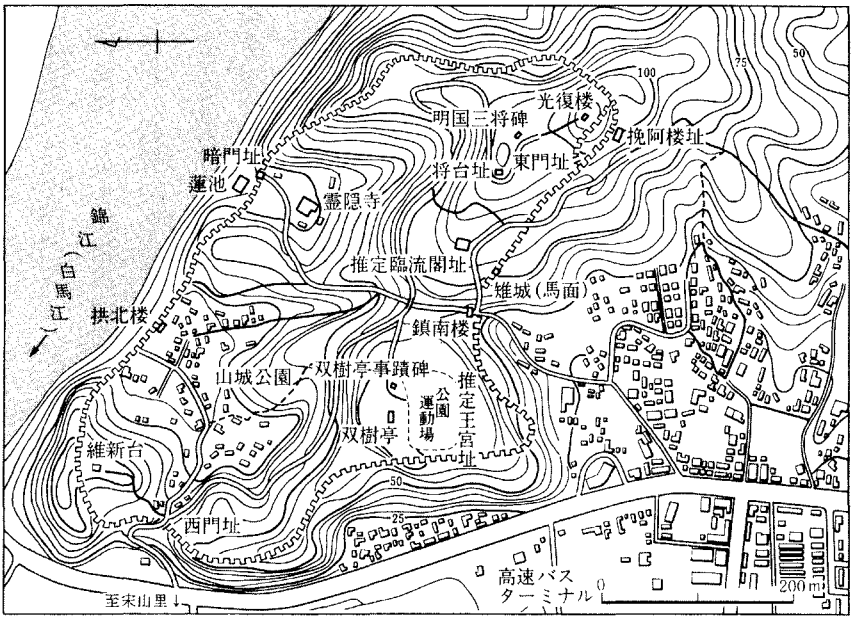

図９　公山城平面図
（東・田中 1989 より転載）

百済ではどうかといいますと、お手元の発表要旨集の同じ二一ページの下に、百済の二番目の都、現在の公州に公山城という山城がございます（図九）。この地図は、左が北で、右が南になっていますが、北側を流れる錦江に面して山城がございます。この山城の南の麓におそらく平地城があって、その背後の北の丘に山城を築いたということが、戦前からずうっと言われてきました。現に南側の民家の一角で、礎石が見つかったということも指摘されております。まあ、そういうことなんですけれども、現在ここに行かれたら分かりますが、市街地の真っ只中ですね。結局、実態不明のまま現在に至っているということなんです。

それとは別に、この公山城の調査が進んでいまして、今現在も発掘を行っております。その過程で重要な遺構が見つかりました。この図面にございますように、山城内の各地に平坦地があります。ここも標高が一〇〇メートル前後ということで、鞠智城よりもさらに比高は低い山城です。ここには、平坦地がずいぶんありまして、あちこちに建物が建っていました。例えば、同じ二一ページの第二図を御覧いただきますと（図九）、真ん中ちょっと南のところに「推定王宮址」と書いてありますね。ここで立派な礎石建物が見つかっています。

そこで興味深いのは、『日本書紀』に相当するような朝鮮側の記録に『三国史記』という歴史書がございます。その百済本紀の東城王二二年（西暦五〇〇年）のところを御覧いただくと、臨流閣を宮の東に建てた、という記録が出てくるんですね。この地図の上の方「推定王宮址」の東にあたりますが、そこに「推定臨流閣址」と書いてありますね。総柱の礎石建物跡が見つかりまして、そこから出た瓦の中に、「臨流」という文字が刻まれた瓦がありました。そこでその総柱の礎石建

物を「臨流閣」の建物の跡だろうと推定しているのです。そうしますと、『三国史記』の記録どおり、宮の東に、つまり推定王宮址の東に臨流閣を建てたとなるわけです。

そういうわけで公州の公山城に関しては、山城と平地城がいっしょになった、つまり王宮ならびにその関連の官衙なども、この山城の中にあったのではないか、と最近では言われるようになってきていますね。

同様に、百済は最後に滅亡する都が、現在の扶余でございます。そこの山城が

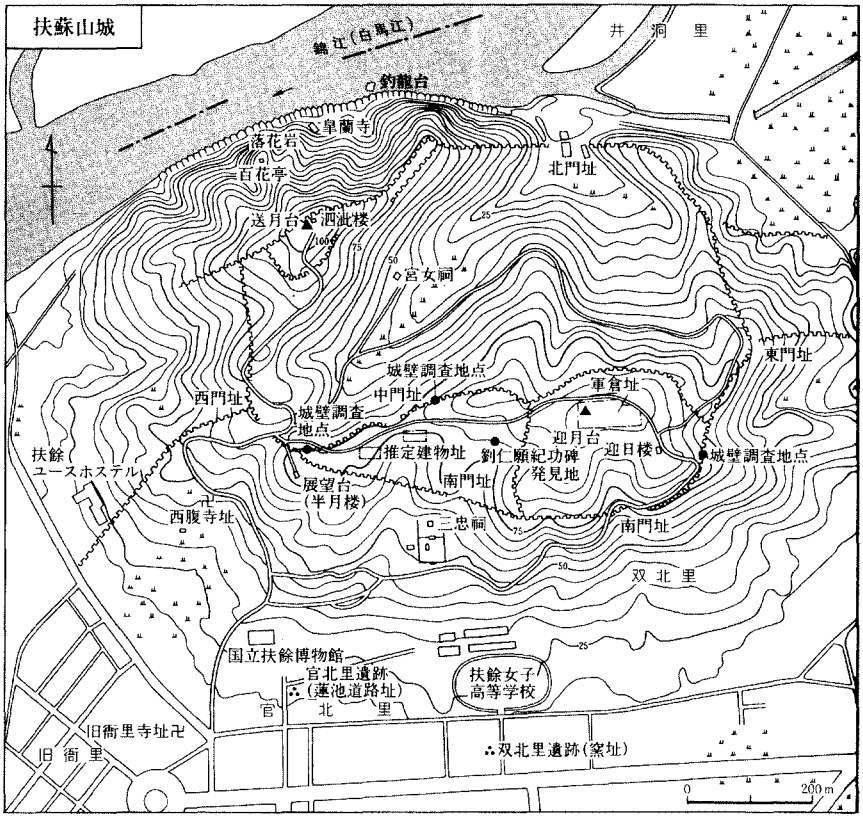

図10　扶蘇山城平面図
(東・田中1989より転載)

扶蘇山城ということで、発表要旨集の図三に出ております（図一〇）。この地図の下側が南になりますけれども、ここでも、戦前からずっと、調査が行われてきました。この錦江に面したところに扶蘇山城があって、その南の麓に王宮なり、官衙があったのではないかと考えられてきました。

現在韓国政府では、史跡の整備をあちこちでずいぶん進めていますけれども、ここも長年にわたって、発掘調査をした後、整備を進めてきました。その過程で、その南麓地域が調査されてきたわけですね。そうすると王宮とか官衙の存在を示すようなものは出てこなくて、例えば、ここは条坊制が敷かれていて、その条坊の道路の跡とか、それから手工業製品、つまり金属器あるいは装身具を作ったアトリエのようなものが見つかっています。王宮とかそういうものにつながるものは、なか

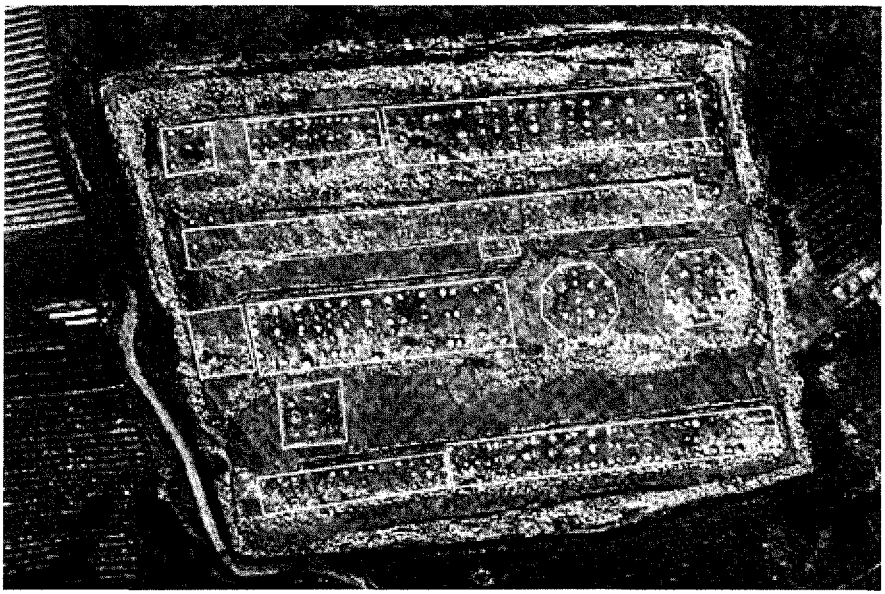

写真 15　丸都山城宮殿跡と八角形建物
（吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004 より転載）

なか見つかってこないんです。

ただ、最近になって、この地図でいいますと、官北里といった、そこに国立扶余博物館と書いてありますが、これは移転して文化財研究所になっていますが、そのすぐ西南のところで、一辺が桁行で三五メートル、梁行で一八メートルの堂々とした、礎石建物が見つかりました。これが初めて見つかったんですね。これを今後どう評価するかという問題なんですけれども、これがたった一つです。

それに比べて扶蘇山城内の内部を見ると、ここも穏やかな山で平坦地がずいぶんあります。そこには建物跡がありますし、中腹では寺院跡なんかも見つかっています。まあそういうことで、現在は、この扶蘇山城自体が、日常的な王宮があったところで、併せて防御性の高い山城を兼ねてい

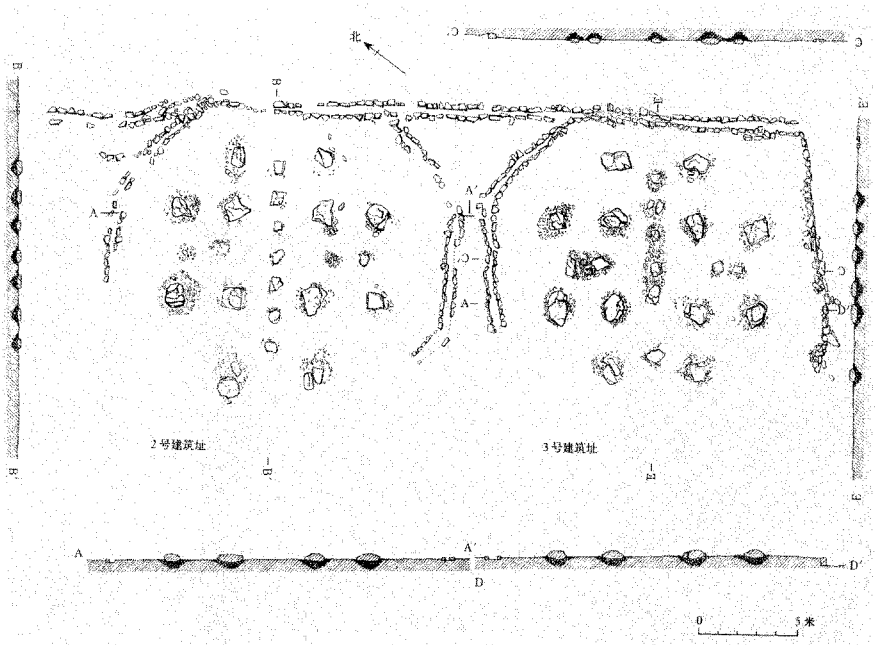

図11　丸都山城の八角形建物
（吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004 より転載）

たんではないか、と言われるわけです。

ここまで申しますと、百済の公山城、そして扶余の扶蘇山城とともに、山城と平地城を兼ね備えたようなあり様というものが、鞠智城と係わってくるのではないか、とそのように私は推定するところでございます。

四　朝鮮半島から見た鞠智城

ところで、昭和四二年から始まった本格的な発掘調査によって、計り知れない成果が上がって、日本の古代山城でここ鞠智城でしか見られないようなものがいろいろあると申しました。

例えば、建物で申しますと八角形の建物があります。柱の配置とか数などは、鞠智城とは違いますけれども、八角形という意味では先に申しました高句麗中頃の時期の都の丸都山城に見られるということは、発表要旨集二三ページの写真を御覧いただきたいと思います（写真一五）。ここでは一一棟の建物が発掘されまして、その中に、写真で言いますと右下の方に八角形建物が二棟見つかっているんです

写真 16　中国・竜潭山城　貯水池

ね（写真一五・図一一）。

こういった建物がこの会場のパネルにもございますが、百済の地域で二聖山城にございます。この山城は元々百済の山城でしたけれども、百済が新羅に滅ぼされた後は、新羅の山城として機能するわけですね。したがって、新羅時代になってからの八角形建物が見つかっているわけです。こういうようなものをどう理解するかということなんです。よく機能はわかっておりません。

鞠智城に関しては、太鼓を備えて、太鼓を鳴らす、鼓楼に推定されていますね。そして、建物が復元されております。高句麗の場合は、これはいったいどういう用途だったかは明らかでないということでございます。

先ほども矢野さんと話をしていたんですが、この鞠智城には八角形建物が二つ建っていますね。南北に二棟が同時に並存していることは意味があると思うんです。それでは一体何なのかというのは、なかなか分からないんです。ただ思い付きで申しますと、太鼓があれば、もう一つ対をなすのは鐘だと思うんですね。中国の西安の街に行かれると、明の時代の鼓楼と鐘楼があります。そこでは朝や夕なに、あるいは緊急時に鳴らす、太鼓があれば当然鐘ですね。単

写真 17　ピョンヤン・大城山城　貯水池

なる思い付きで、証明の仕様がございませんけれども、ひょっとしたらそういったことも考えております。

そして、もう一つだけ申したいことは、鞠智城で大規模な池が見つかったということですね。山城にとって籠城、つまり立て籠もるという問題があります。それが長年、何年にも亘るかもしれません。その時に水源は、水は非常に重要ですね。ですから、どの山城でも、水源はちゃんと確保しているんです。

ところが大野城の場合、水源らしい水源はないんですね。小さな池があったり、井戸が一つ見つかったりという程度です。それに比べて、鞠智城は、堂々とした池を備えているんですね。そういう意味では、中国の吉林省吉林市に竜潭山城（写真一六）というところがございます。そこは高句麗が一番北西まで領土を広げた時の山城です。ここに写真に写っていますような、ものすごい立派な、護岸の石垣のある池が見られます。同様に、これは私が一九八六年にピョンヤンへ行った時に撮った写真ですけれども、大城山城の中にも大きな池があるんです（写真一七）。ここでは、いたるところに、一辺が一〇メートルぐらいの石組みの井戸が全部で一七〇カ所ぐらいあるというんです。

そのように比較して考えますと、日本の山城の中で唯一、鞠智城で立派な池が発掘されたということは大変なことだというわけですね。まあそういうことで、今後とも研究課題は、いろいろ残っておりますけれども、私なりに考えるところを申し上げて終わらせていただきます。

御清聴ありがとうございました。